

## 詩吟（青の洞門）・福沢諭吉 そして 蘭学事始

2020年 3月25日 中道 和也

むかしむかし、ロングロングアゴー、NHK 娯楽番組「連想ゲーム」がありました。テレビを観ている人も出演者と同じように連想できる楽しい番組でした。

さて、詩吟（青の洞門）を連想の始めとして、なにを連想していきましょうか？

連想ゲームは、青の洞門→福沢諭吉→蘭学事始→前野良沢→杉田玄白→解体新書。

この地上の星たちを結びつけている赤い糸、それは、中津藩（大分県中津市）です。

結びついた地上の星たちの天空での星座は、どこにあるのか探してみましょ。

青の洞門と福沢諭吉については、「福沢諭吉のふるさとの道（大分県中津市）」朝日観を競売新聞2018（平成30年）年2月17日（土）に掲載されています。中津藩の溪谷「耶馬溪」の景から守ったのは中津藩出身の福沢諭吉です。耶馬溪の中でも特に険しい絶壁の連なる競秀峰の腹を這う難所の道で人命を落とす事故の多いことを見聞した僧侶禅海和尚と石工たちは、手とのみだけで岩を削り青野の同門を開通させた物語を有名にしたのは、詩吟（青の洞門）と菊池寛著の「恩讐のかなたに」です。そのこのところ、うまく伝えています。

当時、景観を保護する思想は進歩的思想でした。

詩吟 網谷一才（青の洞門）：

「断崖絶壁乾坤を阻む 難路除かんと欲して 命魂を抛つ 遂に眼前開く 雄大な眺め  
恩讐両つながら 解けたり碧の洞門」

福沢諭吉は、「学問のすすめ」「慶應義塾大設立」などで、あまりに有名です。

明治時代にも活躍し、更に、現在21世紀2019年も、私たちの周りで活躍しています。

お札1万円札の表紙の肖像です。2004（平成16年）に表紙を飾った福沢諭吉は、2024年頃、その役目を解かれる予定です。福沢諭吉さん！ありがとう！福沢諭吉と「蘭学事始」とのつながりについては、

福沢諭吉は2回の「蘭学事始」の発刊に奔走したのです。

「解体新書」：安永3年（1774）杉田玄白 中川淳庵 石川玄常 桂川甫周 須原屋市兵衛版元

「蘭学事始」：1815杉田玄白から大槻玄沢 明治2年（1869）福沢諭吉同志一同 天真楼版元

「蘭学事始」：明治23年（1890）第1回日本医学会総会で配布。編集兼発行者 山口県士族林茂香

「解体新書」は人体の解剖書メディカルブックです。「蘭学事始」は、「解体新書」にかかわった蘭学者の人間模様をつづった回顧録でもあり、追悼文でもあります。

福沢諭吉を2回の発刊にかりたてた胸の内の熱い思いには、2つの理由があるのです。

1つは、前野良沢です。福沢諭吉と前野良沢とは、共に中津藩出身です。「解体新書」の著者の中に前野良沢の名前はありませぬ。ただ、前野良沢は、蘭学の師である吉野永章に杉田玄白を連れて、でき上がった「解体新書」のできばえの評価をうかがうために訪問したとの記述があるのみです。「解体新書」の翻訳作業では、舵も櫓も無き舟で蘭学の大海にこぎ出し、蘭学に翻弄されながら、ターヘル・アナトミアの翻訳完成を目指していく小舟の船長が前野良沢であり、翻訳メンバーの盟主でもあり、先生でもあった。その事を知った福沢諭吉は、



中津藩でも江戸でも有名な前野良沢が埋もれたままになっていることに、衝撃を受けたのです。前野良沢こそが、「解体新書」の主導者であることを明治時代の医者にも世の中の人にも知らしめようと決意したのです。

2つは、福沢諭吉の仲間、神田孝平が、たまたま、湯島聖堂裏の露店で手にした「蘭学事始」が杉田玄白の弟子大槻玄沢に贈った親書であり、「解体新書」と相俟って日本の西洋化していく医学・科学上の重要な冊子であると認識し、それに光を当てたかったのです。福沢諭吉は、杉田玄白の家系の杉田れんけい氏の自宅を訪ねて出版の意義を丁寧に説明し、承諾を得た後に「蘭学事始」（明治2年）を杉田玄白の開いた蘭学医学塾「天真楼」を出版元として世に出したのです。

「蘭学事始」（明治23年）の中に、露店で行先不明の「蘭学事始」を発見した神田孝平こそが「蘭学事始」の功労者であると書かれています。日本医学学会総会で、この本を医者に配ったのです。福沢諭吉の人柄ですね。福沢諭吉は、埋もれそうな耶馬溪や埋もれていた蘭学事始—前野良沢に光を当て現在・過去・未来に貢献しました。

「蘭学事始」の現代語版はロングセラーの名著です。「蘭学事始」杉田玄白著・緒方富雄校注・岩波文庫233-022-1（青20-1）、第1刷1953年3月25日、第59刷2018年4月26日。構成は、蘭学事始上之巻11-42頁、下之巻42-72頁、注・年表・解説は73-196頁です。歴史に基づく解説ですので「解体新書」「蘭学事始」を理解できたという充実感を満たしてくれます。

「蘭学事始」上之巻・下之巻には多くの蘭学者が登場します。「解体新書」の人氣がきっかけとなって、従来の漢方医師も怒濤をなして、蘭学医師に転向していったことがわかります。登場人物はおおよそ80名、何度も登場する人もいますので、延べ人数おおよそ200名あります。杉田玄白と交流のない蘭学医師も多くいましたから「解体新書」以降、蘭学百花繚乱の時代がきたのです。杉田玄白が最後まで信頼した人物は（登場回数）でわかります。杉田玄白（75）、前野良沢（35）、平賀源内、（15）、大槻玄沢（19）、宇田川玄隋（8）、宇田川玄真（11）。平賀源内は杉田玄白と親友であり、陰の主演なのです。杉田玄白が和蘭語の翻訳を通詞に依頼せず、自ら翻訳・出版して解体新書を作ろうとしたのは、平賀源内との付き合いの中で発想しており、解体新書の洋画家の紹介もしてもらっています。翻訳中もなにかと相談しているはずですが、解体新書の著者には名前がありません。なにが理由があるはずですが、大槻玄沢は実質上の杉田玄白の後継者。宇田川玄真は、一度は娘婿でした。岡山県津山藩の漢学洋学の有名な宇田川家の一人です。前野良沢の登場回数は別格です。杉田玄白と前野良沢の2人は天命により結ばれた最強のペアなのです。

杉田玄白は、亡くなる寸前までも、前野良沢への深い想いをもち続けていました。

1. 腑分けの知らせを志篤き良沢に漏らすべき人にあらず。（玄白が良沢を誘った）
2. 腑分け見学の時良沢と玄白が持参したターヘル・アナトミアは同書同版だった。
3. ターヘル・アナトミアに挑む際に、良沢を盟主と定め先生とも仰ぐ。
4. 天性の奇人、天然の奇士、常人と万事異なる奇を好み、自ら蘭化と称する。
5. 良沢と言う人なければ、この道開くべからず、且つ、玄白が如き素意大略の人なければ、この道かくも速くには開くべからず。これ又天意なり。

驚くことに、ターヘル・アナトミアのオランダ語の人体臓器の名称の日本語への翻訳方法は、21世紀2019年現代のAI技術（人工頭脳）の個体認識と非常に似ています。ターヘル・アナトミア以外のオランダ医学書10冊をも手に取り、似ている絵や単語を集め類似性を見比べ、連想ゲームに似て想像をたくましく連想を重ねて日本語の臓器の名称を決めていったのです。翻訳のスピードをあげるために翻訳のレベルを翻訳・対訳・直訳・義訳に分けた方法をとっています。

「蘭学事始」には同じ文章が2度出てくるところもあります。85歳で亡くなる2年前の83歳の時に、何回か、病床を押し机に向かった時には、心に浮かぶよしなしごとをそこはかとなく、いとおしく思いつつ、仲間への回想録でもある追悼文を書き綴ったのです。「次第に老いて疲れてきたので、この後このような長文は書けないと思う。また、生きているうち



に、これを書いて絶筆になると知りつつ書き綴る」と記されています。

「蘭学事始」を書き残さねばならぬと思う気持ちを後押ししたのは、翻訳仲間たちから「草葉の陰」とあだ名をされた杉田玄白だけ1人が生きながらえており、千古の人となってしまった仲間への追悼文を書こうと。一生のエネルギーを使い果たすぐらいに蘭学気狂いになった当時の生々しい雰囲気や正しく後世に伝えるのが義務と感じ、同時に仲間へ感謝したかったのです。また、俗説も出始めていたのです。

「解体新書」は、当時のキリスト教禁止や和蘭書の翻訳検閲の幕府、勢力の強い漢方医師、世の中の常識などへの挑戦状でしたから、出版禁止、版木の没収、著者や家族への弾圧に対して配慮しています。当事者、家族、出版元も心配していました。

1. キリスト教関連として挙げ足をとられないように、キリスト教を暗示する言葉やローマ字使用を避けています。
  2. 翻訳以外に、著者名、発行手続き、人脈利用の検討には、2年半の月日です。
  3. 著者の1人、桂川甫周は幕府や大奥に通じる人脈を持っていて、発刊以前に大奥に届けています。大奥の力を知っており、大奥に伺いをしているのです。
  4. 「解体新書」発刊の一年前、「解体新書」の内容見本「解体約図」一般用に発刊。
- このあたりの気配りは、藩医だけでなく町医者をしていて、世情には慣れている杉田玄白の手腕です。杉田玄白はジェネラルマネージャ兼発起人、平賀源内は仕掛け人、前野良沢は翻訳者兼同意者、小野田直武は洋画家。これが解体新書の構図です。

A. 「解体新書」には謎があります。

1. 正担当の石川玄常は中途から翻訳に加わっています。しかし、これという仕事をしていません。それでも著者の1人です。本当の担当は何なのでしょう。
2. 桂川甫周は幕府の役人です。幕府への橋渡しの役目は玄白の知恵なのかしら。
3. ターヘル・アトミアの人体図と「解体新書」の人体図が違う。なぜなの。
4. 僕の資料探索の不足なのでしょうが、お金に関する史料が見つからないのです。杉田玄白の小浜藩からの借金額、発行回数、部数の数、発売価格がわからない。今回に限らず、一般的に、学術古文書に係る金銭的情報は極端に少ないのです。

B. 「蘭学事始」にも謎があります。

1. 解体新書の洋画家、小田野直武も謎なのです。  
彼の絵と名前とコメントは、「解体新書」にはありますが、「蘭学事始」には、一言も記載されていません。故意に杉田玄白が、はずしたのです。なぜ？  
小田野直武は、「解体新書」の1年後、秋田藩に戻されて、更に、1年後、不可解な亡くなり方をしているのです。

ターヘル・アトミアの正確な臓器の洋画の描写に魅せられた杉田玄白は、気心の知れた平賀源内からの紹介により、小田野直武にターヘル・アトミア洋画の模写を託して「解体新書」に掲載したのです。彼の絵は衝撃的な絵でした。漢方医者、蘭学医者、町の人々の度肝を抜いたのです。「解体新書」の人気を一気に上げて、日本の医学を漢方医学から蘭学医学へと変えた大立役者です。小田野直武の採用のいきさつとか、小田野直武が一年半で絵を仕上げたいいきさつとかを、「蘭学事始」で取り上げて感謝してもいいのではありませんか。ねえ、玄白さん。余りにひどいうちですよ。書きたくても書けない事情があるのでしょうか。

私は、漢方医が頼った五臓六腑図よりも、進歩的な漢方医の山脇東洋の解剖図「臓志」を取り寄せて、小田野直武が画いた「解体新書」の解剖図を較べてみました。それでも、誰が見ても、驚愕するくらいに、精密度が違います。進歩的漢方医者が、西洋解剖図に驚愕して、すぐさま蘭学医学に転向したのを実感しました。

杉田玄白は「蘭学事始」で、自らの思想と共に謙虚な心も書いています。

1. 平賀源内と話し合っています。和蘭実窮理の驚くべき事を理解して自ら翻訳すれば格別

の利益を得ること間違いなくその業績ならば大いなる国益となる。

2. その図を実物に照らし見た時に思った。実にこの学問の開くべき時至りける。
3. 人の生死は予めがたし。始めて発する人は人を制し、遅れて発するものは人に制せられる。
4. 医療変革には、翻訳を急ぎ、和蘭医学の大筋を早く知らせるのを第一とする。
5. 漢方医学を止めさせ、蘭学医学を早く広める志の大きさは私が一倍大きい。
6. 不用意ながらも、生民広済のためにと、とりつきがたきに刻苦の翻訳を始めたのも天意というべきものなり。
7. 良沢無ければこの道開かず、且つ、素意大略の玄白無ければ、この道はこんなに速くには成功しなかった。天助なるべし。
8. 蘭学医学の始めし時より、今日の興隆を観ると、我が身に備なわった幸いのみではなく太平の世の中のお陰である。

青の洞門と解体新書を重ねると、志共々すべてがぴたりと重なります。生民広済のため、とりつきがたきことに刻苦する姿に加勢する人も現れ成功したのです。そして、青の洞門と解体新書一蘭学事始との両方に関わる福沢諭吉も現れてきます。天が求め、地が求め、人が求め、時代が求める人、「その人 THE MAN」がタイミングよく必ず現れる。人の世って不思議なものですね。

[会員の近況報告へ戻る](#)